

情報社会を多元的に捉える 質的研究法

編集にあたって

畑田裕二 | 東京大学大学院情報学環

質的研究法は、情報処理分野においても決して新しいものではない。Human-Computer Interaction (HCI) 分野の国際的な中核をなす SIGCHI では、設立当初から人文社会科学の知が取り入れられてきた。本会においても、2013 年には会誌特集「ユーザスタディのフロンティア」において言及されているほか、情報システムと社会環境研究会 情報システム有効性評価手法研究分科会によって「質的評価ガイドライン^{☆1}」も策定されている。しかし、そうした取り組みを経てもなお、質的研究法は一部のコミュニティの限定的な実践にとどまっており、いまなお分野全体で広く認知されているとはいえない。

にもかかわらず、本特集では質的研究法の魅力とそれが情報処理分野にもたらす価値を、もう一度掘り上げてみたい。

AI をはじめとする技術革新により、情報処理技術に触れる人の裾野は驚くほど広がっている。人の数だけ異なる情報との接点があり、ドラマがある。技術は各々の文脈の中で解釈され、利用され、再編成され続けている。

そのような多元的な情報社会で起こる出来事は、もはや単一のモデルや平均化されたユーザー像によって捉えきくことは難しい。効率・再現性・客観性といった価値観とそれを実証する定量評価は、情報処理を科学として支える基盤であった一方で、時として数値化される前の複雑な経験の諸相のいくらかを取りこぼしてしまうことがある。いまこそ、人々の生きられた行為や経験、当たり前とされている概念や規範、意味生成のプロセスを丁寧に描き出す質的研究法が、これまで以上に重要になる……と、思う。

本特集では、質的研究法の魅力や情報処理分野における価値について論じた7つの記事を収録した。

加藤淳氏（産業技術総合研究所／アーチ（株））は、アニメの絵コンテ制作を支援するツールを開発・研究してきた経験をもとに、つくる前に現場を理解する形成的調査と、つくった技術の「よさ」を示す評価という2つの質的研究法の使いどころを具体的に解説している。

池谷のぞみ氏（慶應義塾大学）は、119 番通報の「エスノメソドロジー^{☆2}」研究が、緊急通報を受け付け

☆1 <https://ipsj-is.jp/w/wp-content/uploads/2013/09/3b6e39289557eb78cd49af7bab71f12a.pdf>

☆2 人々が日常生活で無意識に実践している「当たり前」を明らかにする方法論。

る組織のそれまでの「当たり前」を見直すきっかけとなり、システムの改善をもたらした事例紹介を通じて、質的研究がテクノロジーデザインのエビデンスたり得ることを示した。

岡部大介氏（東京都市大学）は、工学者がすでに無自覚に質的研究法を実践していることを指摘する。教師の前で平然とタバコを吸う労働者階級の少年たちが学校の外では彼らなりの「学習」を経験していたことを描いた『ハマータウンの野郎ども』のように、一見非合理的な行為の中の合理性を読み解く「翻訳者」の視点は、平均的なユーザー像からこぼれ落ちる人々を深く理解するためにも重要だ。

森田敦郎氏（大阪大学）は、入出力が定義された「システム」として世界を捉える工学に対して、人類学が状況に埋め込まれた「プラクティス（実践）」として世界を記述する立場を取ることにについて解説する。その視座は、生成 AI が UI を不要にしていくな「SaaS の死」から、計算と環境・エネルギー・地政学の絡み合いにまで及ぶ。

東條直也氏（（株）KDDI 総合研究所）は、デザインの実践を通じて知識を生成する研究法である「リサーチ・スルー・デザイン」を、企業研究の現場から理論化する。研究の問いと事業のゴールのあいだに生じるずれを、解消すべき欠陥ではなく新たな知を生む「生産的な緊張関係」と捉え直すその枠組みは、「つくること」そのものを研究的な営みへと変える。

原有希・新関亮太・岩木穰氏（（株）日立製作所）は、約 30 年にわたる自社のユーザーリサーチ実践を、ユーザーを理解するユーザビリティ評価と、ワークプレイスや業務を理解するエスノグラフィー調査の両輪として示す。現場で重ねられた約 270 件の調査実績は、質的研究が事業の中で日々機能する方法であることの何よりの証である。

特別対談では、日本の CSCW 研究の草分けである葛岡英明氏（東京大学）と、質的研究法をいち早く取り入れてきた HCI 研究者の山下直美氏（京都大学）が、日本のインタラクションコミュニティのこれまでとこれからを語り合った。質的研究に関する経験や歴史、そして若手への助言が、特集を未来へとひらく。

計算機のつくり出す情報の渦が人間の意味を絶えず問い続けている現代だからこそ、質的研究法が役に立つはずだ。あるいは役に立たなくとも、あなたのコンピューティング人生にこれまでとは違った視点をもたらしてくれる。きっとそこから、面白い研究が生まれてくる。本特集が、情報処理分野の研究の「面白さ」を数値ではないやり方でひらき、読者の皆さんの好奇心に火を灯す一助になれば幸いである。

最後に、本特集を組むにあたって、本会の会誌編集委員会の方々、および東京大学の矢作優知氏・中條麟太郎氏に助言をいただきました。改めて感謝します。

（2026 年 6 月 12 日）

概要

1 技術の「よさ」を考え、示すための質的研究

応
般

加藤 淳 | 産業技術総合研究所／アーチ（株）

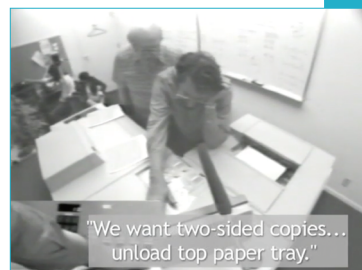
本稿は、HCI やコンピュータ科学における質的研究法の意義を、技術の「よさ」を考え示す方法として論じる。ニッチに見える現場研究も、文脈を丁寧に扱うことで、学術的普遍性のある知見を生み出せる。formative study は何を作るべきかを現場から問い、evaluation は作った技術の可能性・副作用・限界を示す。AI 時代には、効率だけでなく問題設定や文化的価値を問う視点が一層重要になる。

2 エスノメソドロジーとテクノロジーデザイン —エビデンスに基づく革新の共創へ向けて—

基
専

池谷のぞみ | 慶應義塾大学

本稿は、エスノメソドロジー分析の知見が、現場の実践に根ざした「エビデンスに基づく革新」を共創することに結びつく可能性を提示する。「理想化された世界」の活動ではなく、「現実の世界」における状況依存的に進められる人々の活動を体系的に把握することは、一見すると遠回りのように思われるかもしれない。しかし、そこにいかなる「エビデンスに基づく革新」へとつなげる可能性があるのかを、実際の分析事例を示しながら論じる。



3 インタビュー：情報学の隣人として —フィールドワーカーが見る情報処理の現場—

基
専

岡部大介 | 東京都市大学 メディア情報学部

聞き手・編集：畑田裕二

認知科学・学習論を専門とする岡部大介教授（東京都市大学）に、フィールドワークが情報処理分野に果たす役割をインタビューした。工学者がすでに実践している「質的研究法」、システムとプラクティスの差異、「偏り」を発明の源泉と捉える視点、非合理の中の合理性を読み解く翻訳者としての役割。情報学への期待を、フィールドワーカーの目から展望する。

概要

4 インタビュー：人類学者は計算機科学に何を見るか

森田敦郎 | 大阪大学大学院人間科学研究科

聞き手・編集：畑田裕二

科学技術の人類学を専門とする大阪大学・森田敦郎先生に行ったインタビュー。HCI/CSCWの起源や情報学と情報科学の違いと日本特有の状況、AIによる「SaaSの死」の意味、そしてコンピューテーションと環境的・地理的問題が絡み合う現代まで、人類学者の視点から情報処理分野を取り巻く諸問題について語っていただいた。

基
専

5 研究の問いとデザインの目標のあいだで —リサーチ・スルー・デザインにおけるプローブの視点—

東條直也 | (株) KDDI 総合研究所

本稿は、研究の問いとデザインの目標のあいだに生じる緊張関係を探索する枠組みとして Research through Design を再整理する。特に、デザインプローブを知識生成の装置として位置づけ、研究の問いとデザインの目標の関係を実践の中で探索するための視点を提示する。そして、企業のような事業や実装に強く結びついた研究文脈への示唆についても触れる。

応
専

6 製品開発におけるユーザリサーチ —ユーザとワークプレイスの理解—

原 有希 新関亮太 岩木 穰 | (株) 日立製作所 研究開発グループ デザインセンタ

製品開発におけるユーザリサーチの焦点は、ワークプレイスを取り巻く状況により変化する。そうした中で重要とされるユーザリサーチの代表例にユーザビリティ評価とエスノグラフィ調査がある。前者は、ユーザが製品を使いこなせなければ価値を提供できないとの考えのもとで行うユーザを理解する取り組みである。後者は、人と機器の共同作業の視点で仕事の文脈を深く理解する取り組みである。本稿ではこれらの概要や実践例を述べる。



応
般

7 特別対談：インタラクションのこれまでとこれから

葛岡英明 | 東京大学 山下直美 | 京都大学

聞き手・編集：畑田裕二

CSCWの草分けである葛岡英明教授（東京大学）と、早くから質的手法を取り入れたHCI研究に取り組んできた山下直美教授（京都大学）。「技術的新規性」を重んじる日本と「原理の解明」を重んじる欧米の評価軸の違い、言語の壁、若手研究者への助言など、日本のHCI/CSCW研究を世代を分けて担ってきた2人が、質的研究法をテーマに日本のインタラクション研究のこれまでとこれからを語り合う。

応
専